

コメント

司会 川端さんには東方政策のセカンドウェーブについて、また提言の具体的な側面についてさまざまなレベルからお話をいただきました。鳥居高さんと山本博之さんのお二人から、コメントをいただきます。

コメント1

鳥居 高
明治大学



コメンテーターと呼ばれましたので、私の役割は二つだろうと思っています。一つは、私は25年知っているだけです、その立場からルックイーストの古い話を一つします。それからもう一つは、本日の議論の整理と言いますか、コメントになります。

■ 日本と東アジアとの対立の渦中で打ち出されたルックイースト政策の衝撃

まず、古い話に関してですが、先ほど、いろいろとルックイースト導入の経緯のお話が紹介されました。ルックイースト政策は、日本社会において一つの衝撃だったのだと思います。東南アジアの指導者が、1980年代のはじめ、すなわち円高以前、日本企業が東南アジアにおいて非常に大きなプレゼンスを示す前の段階で、「東側に学ぼう」、「東アジアに学ぼう」といった点です。ちなみにマハティールが最初に言ったわけではなくて、それ以前にリー・クアンユーが言い出していることなので、いわばリー・クアンユーの焼き直しといえ焼き直しですね。

もう一つ、当時日本を取り巻くアジアの状況は、1982年に日中、日韓の間で教科書問題が起こっています。日本と東アジアの国々では過去の問題をめぐる対立関係があり、そういう中でリー・クアンユーとマハティールが、いわば未来志向的な関係を取り結ぼうと

した、そういう意味で衝撃だっただろうと思うのです。

それにもう一つ、「ルックイースト」はどこから来ているのか、マハティールさんに聞かなければわからない話で、自叙伝に書いてあったこともそうでしょうし、あるいは日本経済新聞の「私の履歴書」の中で書いていますが、彼は自分が政治家として一時期放逐されたあと、マレーシア食品開発公社という会社の会長となり、パイナップル農園しかしていなかったFYMAという会社が今でいうところの上流までの加工までやってしまうということで、パイナップルの缶詰の付加価値を高めて世界に売り出すということをするのです。このときに知恵を入れたのが日本人のビジネスマンたちで、そういうあたりもあったのではないかと理解しています。

■ 「ルック」の対象は何だったのか —— 東方政策の多義性と拡大

2点目の本日のコメントとしては、ルックイーストポリシーについて今日何人かの方がプレゼンテーションして、「ああ、やっぱり多義性を持っているんだな」と改めて感じました。ルックイーストポリシーと言いますが、「ルック」、つまり何を見たのか、何を見ようとしたのか議論になるのではないかと思います。

例えば、政策としては「ルックイーストポリシー」という言い方をしますが、午後のセッションで古い訳し方が1回だけ出ました。それが「日本に学ぼう政策」で、日本社会では長らくこう言われてきました。今回吉村真子さんの東方政策の説明では「日本と韓国から学ぶ」という正確な表記をなさっていましたが、まさしくルックイーストというのは日本だけでなく、韓国にも学ぶ政策です。

では、「ルック」と「学ぼう」をどう考えるか。「look Asian nations」なのか「look people and Asian nations」なのか、政策を学ぼうとしたのか国を学ぼうとしたのか、あるいは人々を学ぼうとしたのか、そのあたりによってネクストについての議論が分かれてくると思います。

■ 東方政策の中身についての日本側の解釈とマレーシアのねらいとがズレを生じている

発表に即してお話すると、山本課長のネクスト・ルックイーストのときに、「マレーシアが中国に向いている」と言っていましたが、そりゃかないませんよ。マレーシアにとって中国はモデルではないのですから。けれども、マレーシア政府が考えていることは、ルックイーストポリシーによって中国との経済関係

を強くしようという意味においてルックイーストで、これはまさしくルックイーストを経済外交であり外交政策として捉える捉え方だろうと思います。

それから、吉村さんが紹介された「失敗を学ぶ」ということについては、まさしくそのとおりです。数年前、明治大学にマハティール首相が来たとき「ルックイースト政策を続けるのか」との質問に対して、「いや、われわれは失敗からも学ぶことがある」と言って会場が大爆笑になりました。「だからこそ日本には早く回復してほしい」というメッセージをくれました。

私自身は、穴沢さんの説明がとてもしっかりくる思いでした。穴沢さんは資料の中で「工業政策の模倣まで」とおっしゃいました。日本社会ではルックイースト政策というのは単なる人材育成政策から徐々に拡大解釈されてきたのではないかと理解しています。

つまり最初は人を通じて人を育てることによって日本の経験や日本人や韓国人が成功した価値観を学ぼうというものだったのが、1985年の円高で一気に日本の企業が東南アジアに出て行って、マレーシア経済に大きなプレゼンスを示して、その中で日本企業あるいは経済モデルの発信、あるいは日本の産業モデルがマレーシアの発展のモデルになりうるというかたちで、ルックイーストポリシーの中身が、日本側の解釈とマレーシア側の解釈あるいは狙いなどが変わってきているのではないかと考えています。

■ 経済関係、人材育成、開発モデル ——多面的に考えて「ネクスト」を考える

代表的なのは、中小企業育成政策や日本の通産省が作った機械産業振興法を真似して導入した経緯です。マレーシアが1960年代に中小企業について議論をします。これは企業規模が小さいという意味においての中小企業を作ろう、資本もそんなに集まらない、雇用もそんなにたくさん最初からできない、だから大企業に対して中小を育てていずれ大企業にしようという話ですが、いつのまにかマレーシアを含め東南アジアでも裾野産業や部品産業としての中小企業という議論になり、それがモデルとなって、ルックイーストの一つの柱になっていったのではないかと思います。

一つひとつ挙げればきりがありませんが、経済関係としてのルックイーストと人材育成政策としてのルックイーストポリシー、それから開発モデルとしてのルックイーストポリシーという、多面から考えて次のネクスト・ルックイーストポリシーを考える必要が出てくるんじゃないかと思います。

■ マレーシアの経済、高等教育、サービス産業 ——未来を考える際の三つの前提

その際に考えなければならないことが三つぐらいあると思います。一つはマハティール時代、ルックイーストポリシーが一国完結型の開発モデルをベースとしてマレーシア一国で開発を成し遂げるという立場での人材育成であり産業政策を唱えていたという大前提です。

これに関してコメントは必要ないと思います。現在のマレーシアを取り巻く状況が違うということです。端的に言えば、AFTAが動いていく中でマレーシア経済がどうなるかという大前提をもとにルックイーストポリシーが出てくるかと思っています。

それから、マレーシアが模索しつつも大きくマレーシア経済が変わっているわけです。どうなるかわかりませんが、民間の高等教育がハブになろうとしている。じゃあ、それと日本の高等教育はどう関わっているのか。これは実は天に唾をつく話で、日本の大学教育はどんどんアイソレートされておりまして、スーパー・ガラバゴスになりつつありますので、大学に勤めている私としては大変困るわけです。

それからもう一つ、さきほどのハラルの話はとてもいい話でした。マレーシア経済が製造業からサービス産業化して、サービス経済化が今ものすごい勢いで進んでいることは皆さんご存知のとおりだと思います。そうすると、マレーシアの基幹産業としてのサービス産業と日本がどう関わっていくのか、なんていうことも一つの議論になるのではないかと思います。

コメント2

山本 博之
京都大学



私からは、JAMSのルックイースト政策に関するこれまでの議論や今日のシンポジウムでの発表をうかがって考えたことを、時間の限り二点か三点お話ししたいと思います。はじめに2つのことをお断りしておきます。私のコメントは社会・文化面が中心となって